

回復過程援助実習でモジュールカンファレンスに参加したことの効果

今泉 郷子¹⁾ 谷山 牧¹⁾ 渡辺 英子¹⁾ 蔵谷 範子¹⁾

要 旨

A 短期大学回復過程援助実習でのモジュールカンファレンス参加による学生への効果を明らかにすることを目的に、平成 17 年度 A 短期大学回復過程援助実習を履修した 2 年生 82 名を対象に、自作のアンケートによる調査を実施した。内容は、看護計画立案実施・チームの支援的効果に関する 11 項目（4 段階リッカートスケール）と、よかったこと・よくなかったことなどに関する自由記載であった。分析は質問項目ごとに集計し記述的統計分析を行い、自由記載内容は類似するものをまとめカテゴリー化した。回収率は 33 名（40%）であった。

モジュールカンファレンスに参加した効果では、看護計画立案実施に関して、全ての項目で約 8 割から約 9 割のものが「非常にあてはまる」「あてはまる」と解答した。チームとしての支援的効果として、「看護師の看護に対する考えや感じ方に触れる機会になった」、「看護に関する考えを広げる機会になった」の項目について 9 割以上のものが、「非常にあてはまる」「あてはまる」と解答していたが、「看護援助について不安を軽減する機会になった」、「看護の悩みを解決する機会になった」では 6 - 7 割とやや少なく、「チームの一員としての位置づけを意識する機会になった」では約 3 割にとどまった。モジュールカンファレンスへの参加は 9 割のものが「有意義であった」ととらえていた。参加してよかったこととして《看護師の考えに触れることができた》《自信につながった》など 7 個のカテゴリーが抽出さ、よくなかったことでは《威圧感・緊張感》《時間設定・時間不足》《不満足感》があげられていた。今後の示唆として、学生が安心・安定した環境で学んでいけるための環境づくりに向けた、教員と臨床実習指導者、病棟看護師らがチームとして学生の学びを支えていくことの必要性が示された。

キーワード：カンファレンス、看護教育、臨床実習指導

I. はじめに

A 短期大学回復過程援助実習では、実習期間中に学生カンファレンスだけではなく、実習病棟でモジュールごとに行っている患者ケアに関するカンファレンス（以下、モジュールカンファレンス）に参加して、学生個々の看護計画についてモジュール内の看護師と一緒に検討していただく機会を設けてきた。これは、学生が計画した内容をモジュールカンファレンスの中で意見交換することによって、受け持ち患者の看護問題をさらに明確にし、より個別で具体的な援助計画の立案と実施ができることを目的としていた。また、モジュール内で臨床指導者

以外の看護師と一緒に計画内容を検討していただくことによって、様々な看護師の考えに触れ視野を広げるなどの機会となることや、学生がチームの一員としての意識を高めることができることもそのねらいとしていた。

参加にあたり学生は、緊張しながらも自分の考えを一生懸命表現し、またモジュール看護師からの意見を建設的に受け止め、ケアにつなげていくことができていた。筆者らは、モジュールカンファレンスに参加する前と後では、明らかに学生のケアの質が変化していくことを実感していた。同時に、学生のチームへの関わり方にも変化が見られていった。

これまで、学生カンファレンスでの学びや効果に関して多くの報告がされているが^{1) 2) 3)}、臨床実習

1) 川崎市立看護短期大学

指導者ではなく病棟看護師とのチームのカンファレンスに学生が参加することで学習効果を報告したものは少ない。そこで、本研究では回復過程援助実習でのモジュールカンファレンス参加の効果を検証することで、臨床と教育がともに協力して学生の教育にあたることへの示唆を得たいと考えた。

II. 目的

回復過程援助実習でのモジュールカンファレンス参加による学生への効果を明らかにする。

III. 方法

1. 対象

平成 17 年度 A 短期大学回復過程援助実習を履修した 2 年生 82 名。

2. データ収集

1) 研究期間

平成 18 年 4 月

2) データ収集方法

自作のアンケート形式によってデータを収集した。アンケート内容は、モジュールカンファレンスでの学習目的と体験してほしいねらいに関する内容を整理し、看護計画立案への効果に関する 5 項目とチームとしての支援的効果に関する 5 項目、および全体的評価 1 項目、合計 11 項目について 4 点リッカートスケール(4 点:非常にあてはまる～1 点:全くあてはまらない)を作成した。また、モジュールカンファレンスに参加してよかったことと、よくなかったことや課題が残ることなどに関する自由記載欄を設けた。全てのグループの実習が終了後、アンケート用紙を直接配布し留め置き法で回収した。

3. データ分析

リッカートスケールによる質問項目については、項目ごとに集計し記述的統計分析を行った。自由記載内容は、モジュールカンファレンスの効果に関する内容を抽出し、類似するものをまとめカテゴリー化するとともに、よかったこととよくなかったことに分類しまとめ比較検討した。

4. 倫理的配慮

アンケート配布時に、本研究の主旨に関する研究依頼を書面で行った。また、自由意志による参加であること、プライバシーは尊重されること、成績評価には一切関係しないことなども書面を用いて説明し同意を得た。

表 1 実習目的と目標

実習目的

病いとともにある対象の回復過程とその局面を理解し、長期的視野にもとづいた、対象にとってのよりよい方向としての回復過程を促す援助を学ぶ。

実習目標

- 1) 病いとともにある対象の回復過程の局面を理解し、長期的視野にもとづいた、対象にとってのよりよい方向を考えることができる。
- 2) 対象の回復過程に影響する要因を理解し、回復過程を促すための援助の方向性を考えることができる。
- 3) 対象の回復過程を促すための援助を実施し、評価することができる。

表 2 実習スケジュール

実習日目	1 日目	2 日目	3 日目	4 日目	5 日目
学習目標	・ 学習環境を知る。	・ 患者の 1 日の生活や行われているケアを捉える。	・ ケアを通して患者を理解する。――どのような生活援助を必要としているのかを理解する。	・ ケアを通して患者を理解する。――患者のこれまでのプロセス(病気の行路・人生史・セルフケア・行われてきた治療と看護)を理解する。	・ 中間カンファレンスを通して、現時点での対象把握内容の整理と、後半の実習に向けての課題を明確にする。
実習日目	6 日目	7 日目	8 日目	9 日目	10 日目
学習目標	・ 受け持ち患者の回復を促すための援助を立案・実施・評価する。 ・ モジュールカンファレンス：チームナースとのディスカッションを通して、受け持ち患者へのケアの方向性・内容を点検し、今後の課題を明確にする。	・ 受け持ち患者の回復を促すための援助を立案・実施・評価する。 ・ モジュールカンファレンス：チームナースとのディスカッションを通して、受け持ち患者へのケアの方向性・内容を点検し、今後の課題を明確にする。	・ 受け持ち患者の回復を促すための援助を立案・実施・評価する。	・ 受け持ち患者の回復を促すための援助を立案・実施・評価する。	・ 受け持ち患者の回復を促すための援助を立案・実施・評価する。 ・ 最終カンファレンス：2 週間の実習内容について報告し、学びを共有する。

IV. 回復過程援助実習について (表 1, 2)

A 短期大学 回復過程援助実習 (2 単位) は、2 年次後期科目である。実習目的として、「病いとともにある対象の回復過程とその局面を理解し、長期的視野にもとづいた、対象にとってのよりよい方向としての回復過程を促す援助を学ぶ」ことをあげている。主に内科系病棟にて、立ち直り期からターミナル期にある患者を受け持たせていただいていた。1 病棟 7 名から 8 名の学生が 1 グループとなり、教員 1 名を指導担当として配置していた。1 クールにつき 3 グループで 4 クールの実習を行った。日々の学習目標は表 2 の通りであり、1 週目は病棟の看護計画に沿ってケアを実施しながら患者との関係作りや情報収集・アセスメント・看護問題の抽出を行い、2 週目に、自ら立てた看護計画に沿って援助を実施・評価していくというものであった。実習病棟は主に内科系の病棟を使用し、どの病棟も通常毎日

午後 30 分～1 時間程度のモジュールカンファレンスを開催していた。

本実習科目までの間に学生は、1 年次後期科目「健康生活援助実習Ⅰ」と 2 年次後期科目「健康生活援助実習Ⅱ」を履修している。また、本科目と同時期に開講している「受療過程援助実習」を本科目履修前または履修後に行っていた。

V. 結果

1. 対象者概要

有効回答数 33 件 (回収率 40%) であった。

2. モジュールカンファレンス開催状況について (図 1,2)

モジュールカンファレンスの開催状況は、45.5% のものが実習 2 週目の月曜日に開催されていた。同じく実習 2 週目の火曜日が 27.3%、水曜日が 21.2%

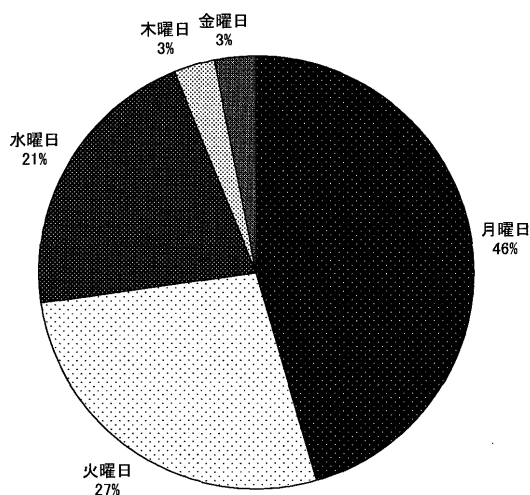


図 1 モジュールカンファレンス開催曜日

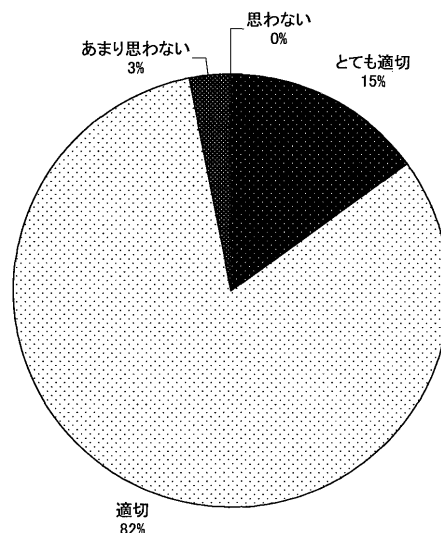


図 2 モジュールカンファレンス開催時期の適切さについて

とこの 3 日間でほとんど全てのもののカンファレンスが開催されていた。開催時期の適切さについては、“とても適切”と回答したもの 15%、適切 82%となり、合計 97%であった。

3. モジュールカンファレンスに参加した効果について (図 3,4)

看護計画立案実施に関する効果として、「具体的な援助を見出すことができた」という設問に、“非常にあてはまる”“あてはまる”と解答したものは 94%だった。「看護問題を明らかにすることができ

た」、「新たな見方を広げることができた」に、“非常にあてはまる”“あてはまる”と解答したものは 91%と多かった。「関わりについて学ぶことができた」では 85%、「新たな情報をえることができたか」では 79%のものが“非常にあてはまる”“あてはまる”と解答していた。

さらに、チームとしての支援的效果として、「看護師の看護に対する考えや感じ方に触れる機会になった」という項目に対して 97%のものが、「看護に関する考えを広げる機会になった」の項目について 94%のものが、“非常にあてはまる”“あてはまる”

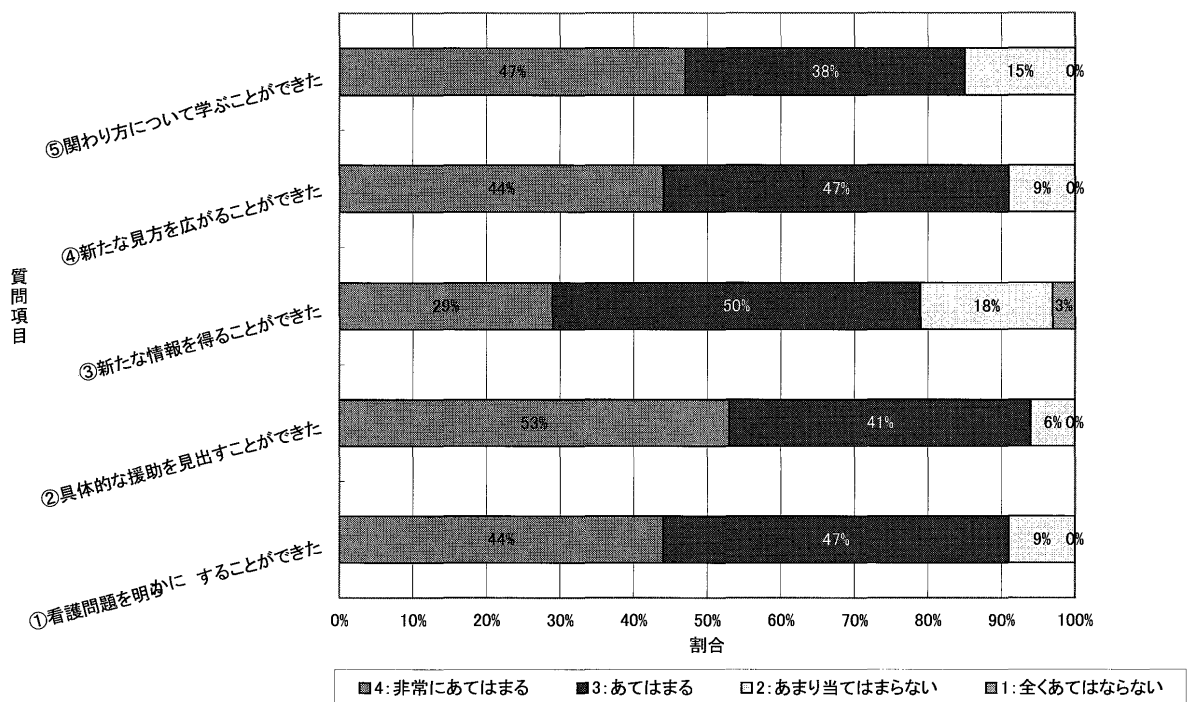


図3 モジュールカンファレンス参加での看護計画立案での効果

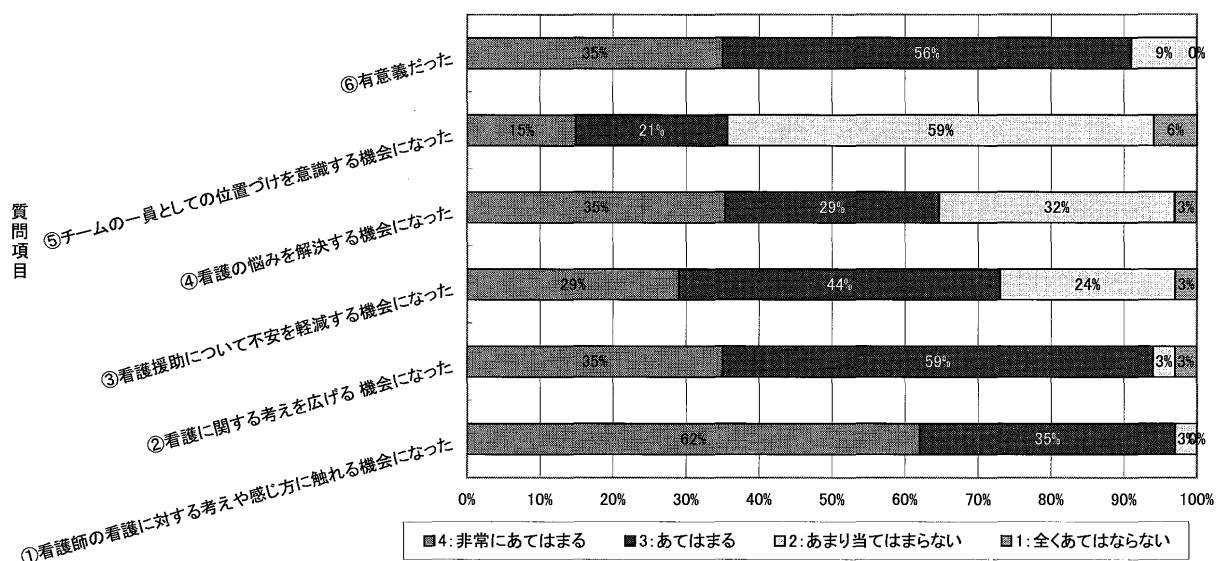


図4 モジュールカンファレンス参加でのチームとしての支援効果

と解答していた。しかし、「看護援助について不安を軽減する機会になった」という項目では73%のものが、「看護の悩みを解決する機会になった」という項目では64%のものが「非常にあてはまる」「あてはまる」と解答しやや少ない傾向が見られた。さらに、「チームの一員としての位置づけを意識する機会になった」という項目では、「非常にあてはまる」「あてはまる」と解答したものは36%にとどまった。

全体として、モジュールカンファレンスへの参加は「有意義であった」の項目では、91%のものが、「非

常にあてはまる」「あてはまる」と解答していた。

4. モジュールカンファレンスに参加した感想

1) よかったこと (表3)

よかったこととして7個のカテゴリーが抽出された。(以下《カテゴリー》として示す)《看護師の考えに触れることができた》では、様々な意見やアドバイスとともに看護師の考えや看護観に触れることができていた。《見方を広げることができた》や《見直すことができた》では、自分では気がつかなかっ

表3 よかったと思うこと

カテゴリー	コード
Nsの考えに触れる ことができた	看護師さんが行っている看護の意味を理解できたこと。
	看護師さんから職場の生の声が聞けたので良かった。
	実際に臨床の看護師さんの意見を聞くことができて良かった。
	自分の知らない看護師の一面の情報を得ることができた。
	モジュールを越えて、看護師さんが、記録など見てアドバイスして頂いたことが嬉しかった。
	Nsの声を聞くことができた。
	モジュールカンファレンス参加前は緊張していたけど、参加して色々な意見が聞けたし、看護師さんと看護について話し合えて良かった。
	実習指導の方が、モジュールカンファレンスのスケジュールの調整に懸命になって下さってとても有意義なモジュールカンファレンスになった。
	普段実習中はあまり看護師さんと接することがなく、看護師さんの考えを深く聞くことができないので、すごく緊張したけれど、そのような機会がもてて良かった。
自信につながった	すごく緊張していたけれど、思っていた以上に親身になって考えてくれて助かった。
	看護師さんの考えや率直な意見が聞け、新たな情報も分かって良かった。
	プロの看護師の考え方が学べた。
	自分のあげている看護問題や援助の方向性を発表しコメントをもらうことで方向性も明らかになり、これで良かったんだという自信につながった。
	看護問題が適切であるかどうか、看護師さんに検討していただいたことで、援助を行うことに自信が持てた。
	設問にもあったが、担当看護師のPtへの看護に対する考えに触れることができ、自分のケアの目的など共有して頂くことで自信がついた。
不安が軽減した	自分の計画をプロであるNsに伝え、ほめていただいたり「良いと思うよ」といわれると自信がつく。
	自信がつくと、より頑張ろうという意欲も湧いて良かった。
	「こんな感じでいいんじゃない？」って言われ、嬉しかったし自信がついた。
悩みが解決した	「それでいいよ」と励まされ、不安が軽減した。
	自分の計画を見てもらえたことで安心できた。
	患者さんとのコミュニケーションに悩んでいた時期だったので、看護師さんに相談することができてとても良かった。
	悩みが解決できた。
見方を広げることができた	看護問題について、介入計画に不安があり患者様への指導をどのように行うべきか悩んでいたため、患者様に関する情報整理、必要な介入・工夫を考える手掛かりが得られた。
	悩みを相談したら親身になって考えてためになる助言をくれた。
	看護の展開の仕方やPtとの関わり方など、Nsの意見を聞くことで別の見方ができた。。
	看護師の方の意見が参考になった。
	自分では気がつかなかった視点での意見や考えを知ることができたし、多くの視点で患者をとらえなければいけないと思った。
	レベルの高い視点を教えてくれた。
	モジュールカンファレンスによって、患者さんを違った視点から考えることができ、広い考えができるようになった。
	看護師さんに自分の立てた計画を見てもらい助言を頂く中で、自分だけでは得られなかった実際の看護の内容を知ることができた。（技術の点や、接し方など）
	参加する前は視野が狭かったのですが、現場のナースの考えを聞き、Ptに行う看護をもっと深いものにすることができた。
	自分では気がつかなかった視点でアドバイスがいただけた。
	自分が知らなかった以前の患者さんについての情報も得られた。

(表3つづき)

見直すきっかけとなった	実際に病棟で勤務している看護師からの視点としての意見を聞くことができたり、自分の記録に目を通していただくことによって誤解を与える表現に気付かせていただいたことが良かった。
	モジュールカンファレンスは、自分の意見を言いにくい印象がありましたが、実際はとても意見交換がたくさんでき、新しい視点や、今自分が行っているケアやアセスメントの良い点や改善点を知ることができたためになった。
	また、発表することで、再度患者さんの全体像を見直すきっかけになった。
	ケアが充実した。
	ケアについてもっとこうした方が良い、このケアにはこういう意味も含まれている、といくつもアドバイスを頂き、その後のケアが充実した。
緊張したがよい経験となった	看護師が患者に行っている看護援助で、情報収集ができてなかった部分を教えてもらえることができ、看護計画に活かした。
	病態をもう一度見直し、計画を修正することでよいケアができた。
	モジュールカンファレンスに参加するというよりは、私のために聞いてもらうという形だったので、余計に緊張した。
	モジュールカンファレンスの参加時はとても緊張した。
他	学生中心のカンファレンスとは全然違ってとても緊張したけど、振り返ると良い経験ができた。
	参加前はとても緊張し、嫌だと思いましたが、とても参考になり良い経験ができた。
	自分の意見をNsに伝えることは、緊張した雰囲気でも簡潔に意見を述べる練習になった。
	先生がフォローしてくれて安心した。
	とても楽しく、良い経験ができた。
	モジュールはとてもためになると思う。これからも継続して欲しい。

表4 よくなかったこと、課題

カテゴリー	コード
威圧感・緊張感	看護師の威圧的な態度の前で、言いたいことが言えなかった。
	学生一人に対して周りをぐるっと囲むような形で話しているグループがあり、ちょっと圧迫感があるなと感じた。
	自分の意見を露骨に否定されたりしたらどうしようとか、不安というより発表することが怖い。
	これも慣れなくてはいけないことだとは思いますが、やはり怖いです。
	緊張が一日中限界だった。
	よくなかったというか、緊張する。
	過去の実習で看護師にきつい言い方で指導を受けたことがある方はたぶん同じ（怖い）気持ちをもっているのではと思う。
	2週目の月曜日だったので、とても忙しくもう少し日をずらして欲しかった。
時間設定・時間不足	時間の調整が難しかった。
	できたら火曜日に行えたら良かった。
	月曜日で中2日あき患者の状況も変わっていたので、できれば2週目の火曜以降がよい。
	もう少し指導を頂く時間があると嬉しかった。
	あまりにもあわただしい中で行うので、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
	4名の看護師が入れ替わり参加していただけたので、少しばたばたした。
	最初から最後まで1名の看護師だけでも参加して欲しかった。
	必要に応じて（退院日前など）患者の家族背景や社会資源の活用状況をもう少し教えて頂けると長期目標計画を立てる上でよかった。
不満足感	時間が限られていて、スタッフの方が多忙ということもあって、もっと色々アドバイスをして欲しかった。
	患者さんの受け持ちのNsの方がいなかったのが残念だった。
	受け持ちの看護師の意見を聞けるといいと思った。
	学生の記録を初めて見たような感想をこぼしていた看護師がいたので、事前情報として記録内容に1回は目を通して欲しかった。
	カンファレンスの進め方がわからず戸惑った。

たことへの気づきを得たり、より深い意味を理解する、改めて点検していく機械となることができていた。《自信につながった》《不安が軽減された》《悩みが解決した》では、看護師の励ましのことばや肯定的な評価から自分のケアに対する不安や悩みの解決となり、自信につなげることができていたようであった。そして《緊張したがよい経験となった》というように、緊張したが参加したことでの効果を感じている様子が伺えた。

2) よくなかったことや課題 (表4)

よくなかったこととして、《威圧感・緊張感》があげられていた。これは、不慣れな場で自分が発表していくことへの緊張感とともに、参加している看護師の態度や否定されることへの恐怖心から、十分に自分の考えを表現できなかったことがあげられていた。《時間設定・時間不足》《不満足感》では、業務が多忙で参加する看護師が入れ替わってしまうなど、カンファレンスの中で十分討議できなかったことへの不満足感が示された。

VI. 考察

1. モジュールカンファレンスの開催時期について

モジュールカンファレンス参加の主な目的は、看護援助内容の個別性を深めることであった。そのため、学生の学習進度と併せ、実習2週目はじめ頃(実習6-7日目)が妥当であると考え、臨床側にも調整を依頼していた。対象者らの回答からも、カンファレンス内容の面からは妥当な設定であったと評価できる。しかし、病棟業務の面からは、週の初めの月曜日にあたりモジュールの看護師が十分落ち着いた環境でカンファレンスに参加することが難しかったようであった。よくなかったことに関する自由記載にある《時間設定・時間不足》や《不満足感》は、まさにその現状から生じていたと考えられる。

2. モジュールカンファレンスの効果

モジュールカンファレンスに参加することで、約9割の対象者らが「看護問題を明らかにすることができた」、「具体的な援助を見出すことができた」ととらえていることから、問題をより明確化し、看護計画の個別性を深めていくことへの効果があったと評価できる。この背景には、対象者らが約5日間かけて集めた情報を整理し、それぞれ受け持ち患者の患者像を描くことができていたことも影響している

と考えられる。その上で、モジュールカンファレンスに参加することで、ただ単に教えられる、指示されるというものではなく、意見交換に参加することができ、「問題の明確化」や「具体的な援助を見出すこと」へと発展できたのではないだろうか。

「新たな情報を得る」、「関わり方について学ぶ」という項目は6-7割とやや少ない傾向であったが、これは実習が2週目という时期的なことによるものと考えられた。実習6-7日目に入り、対象者たちは患者との関係作りや情報収集がある程度進められていたため、特に問題となる状況が多くはなかったことが予測される。また、日々の実習状況から見ると、一日の報告の際に、担当看護師から直接患者の情報提供を受けるという場面も見られており、新たな情報という点での効果は少なかったと考えられる。

しかし、「新たな見方を広げることができた」と捉えているものが9割いたことから、それまでに得ていた情報をどのように解釈するか、意味づけるかという点で効果があったと考えられる。情報は、その意味を持ってはじめて情報となりえる。回復過程援助実習の場合、病気とともに長い経過を経た患者の体験を意味づけた上でアセスメントをしていくことも必要であり、モジュール看護師とのディスカッションは、患者のこれまでの体験を理解し、今の患者の言動の意味を改めて理解していくうえで効果があったのではないかと考えられた。

チームとしての支援的效果として、「看護師の看護に対する考えや感じ方に触れる機会になった」、「看護に関する考えを広げる機会になった」と、約9割の対象者らがとらえていた。自由記載の中では、「思っていた以上に親身になって考えてくれた」、「ふだんあまり接することがなかったが看護師の考えを深く聞くことができ参考になった」、「看護師たちと看護について語り合えてよかった」という記載がみられた。看護師の考えに触れることは、その人なりに触れることであり、その後の実習での関わりにおいても、相談しやすくなる、近づきやすくなるなどの効果も得られたのではないかと推測できる。さらに、自由回答では看護師からの肯定的なフィードバックや親身に関わってくれたなどの共感的な態度が、《自信につながった》、《不安が軽減した》、《悩みが解決した》ことにつながっており、対象者らが看護を実践していくうえでの重要な支援的存在であ

ることは認識できたと考えられる。そのため、「チームの一員としての位置づけを意識する機会になった」と認識できたものは約3割と少なかったが、この信頼感が今後チームとして相互に助け合う関係の土台となっていくことが期待できる。

3. チームで学生の学びを支えること

本研究の対象者である看護学生たちは、臨床という不慣れな環境の中で、相当の緊張状態の中で実習を行っていることが予測され、その不安や緊張についてこれまでに多くの報告がなされてきた⁴⁾。その不安や緊張の一つの要因として、看護師の関わりも指摘されている⁵⁾。本研究でも、よくなかったと思うことでの自由記載内容には、自分がうまく発表できるかということへの不安や緊張感だけでなく、看護師の《威圧感》も示されていた。“自分の考えを否定されること”や“厳しく指摘されること”への恐怖心を強く抱いていたようであった。またこれまでの実習の中での看護師からの関わりによって過度に恐怖心を強めている様子もうかがえた。本研究で取り上げているモジュールカンファレンスの中でも、このような状況が全くなかったとはいえない。

しかし、カンファレンスを通して、学生は看護師の考えに触れる、肯定的なフィードバックや励ましを受け取るという経験から看護師への親密感や信頼感を高めることができていた。この脅かされない、守られているという関係の中でこそ、看護学生たちは患者への関心を高めることができるとともに、積極的な姿勢で学習に臨めるのではないかと筆者は考えている。このような学習環境を作るために、本研究のように臨地実習指導者だけでなく、チームの看護師とともに意見交換を行うモジュールカンファレンスという場を活用していくこともひとつの提案である。より効果的な場となるよう、病棟業務との調整を綿密に行うことが重要となる。本研究でも、じっくり落ち着いた状況でなければ、当然参加できる看護師も限られ、得られる効果も半減し《不満足感》となっていた。また、参加する看護師と学生のレディネスや実習目的・目標、カンファレンスでのねらいを事前に共有しておくことも大切であり、学生本人への事前の目的の理解、そのための準備状況の確認指導も必要である。

教員や臨床実習指導者が、これらの調整や確認・指導において役割を果たし、モジュールカンファ

レンスに参加する看護師たちと連携を取り、学生にとって効果的な経験となるようなカンファレンスが運営できるようチームとして学生の学びを支えていくことが望まれる。

VII. 結論

回復過程援助実習でのモジュールカンファレンス参加の効果を明らかにした結果、

- ①モジュールカンファレンスに参加することで約9割の対象者らが「看護問題を明らかにすることができた」、「具体的な援助を見出すことができた」ととらえていたことから、問題をより明確化し、看護計画の個性性を深められたこと。
- ②「新たな見方を広げることができた」と捉えているものが9割いたことから、それまでに得ていた情報をどのように解釈するか、意味づけること。
- ③「看護師の看護に対する考えや感じ方に触れる機会になった」、「看護に関する考えを広げる機会になった」と、約9割の対象者らがとらえること。

が示された。

看護の示唆として、カンファレンスなどの場を通して、学生が看護師の考えに触れ、肯定的なフィードバックや励ましを受け取るという経験から、看護学生たちは患者への関心を高めることができるとともに、積極的な姿勢で学習に臨めることが示された。

VIII. 研究の限界

アンケート回収率が40%と低く、未回答者の見解が反映されていないことが、本研究の限界である。また、本研究では、モジュールカンファレンスに参加した学生を対象とした効果を報告したが、同じ場を共有した看護師への効果は明らかにしていない。双方にとってよりよい効果が得られる時、本当の意味でチームとしての効果に発展できる可能性があると考えられる。

謝辞

平成17年度カリキュラム改正に伴い、回復過程援助実習は平成17年度を持って閉講しました。モジュールカンファレンス開催にあたっては、実習病棟棟長や臨床実習指導者をはじめ病棟看護師の皆様にも、忙しい業務の間を縫って時間を調整していただきました。その時の

患者様の状況に応じ、また学生の学習進度に応じ、適切なアドバイスやご支援をいただけたと感じています。この場をお借りして感謝申し上げます。また、筆者自身、今後も臨床と教育がともに学生の学習を支援していけるような方法を検討していきたいと考えています。

アンケートにご協力いただきました学生の皆様にも、改めて感謝申し上げます。本研究で明らかにさせていた

いただきました内容は、学生の皆さんの努力の結果得られたものです。卒業後もさまざまな課題にぶつかることも多いと思いますが、チームでともに作り上げていける看護を目指し前進していただけることを願っております。

引用文献

- 1) 猪股祥子他：周手術期実習におけるカンファレンスと修得との関連，秋田県看護教育研究会誌, no.27, 2002, p.2-6.
- 2) 瀬川睦子：臨地実習における看護計画をテーマとするカンファレンスでの指導，川崎医療福祉学会誌, vol.11, no.1, 2001, p.43-48.
- 3) 齋藤玲子：神奈川県立看護教育大学学校教育研究収録, no.26, 2001, p.158-165.
- 4) 雄西智恵美他：看護学教育研究の動向 その2.「日本看護学教育学会」学術集会講演集における研究取り組みの視点の分析：日本看護教育学会誌, Vol.15, no.3, 2006, p.65-74.
- 5) 霜田敏子他：埼玉医科大学短期大学紀要, Vol.16, 2005, p.57-68.